

税は何のため

野瀬 隆平

海辺に邸宅を構えるこの人は、二人の子供と暮らしていた。

あるとき、心地よく暮らせるようにと子供たちに協力を求めた。庭の芝を刈る、食器を洗う、車を洗うなどなど。そのご褒美として、自分の名刺をあげようと云った。例えば、皿を洗ったら名刺 5 枚、庭仕事をしたら 25 枚と。

数日たったが、家はきれいになるどころか、荒れた状態に。なぜ協力してくれないのかと尋ねると、子供たちは呆れた顔をしてこう云った。

「何の価値もないパパの名刺をもらうために、なぜ働かなきゃならないの」と。

子供たちは名刺を必要としないから当然のことだ。そこで、子供たちに、「君たちに手伝いは求めない。ただ、毎月、パパの名刺 30 枚を払ってほしい。それが出来なければ、君たちに与えていた特典を取り上げる」と告げた。

テレビも見せないし、プールも使わせない。ショッピングにも連れて行かないと宣言したので。

いわば、自分の名刺でしか払えない「税金」を課したのである。ここで、ようやく名刺に価値が生まれたのだ。子供たちは家中を走り回り、あっというまに全てがきれいになった。

単なる紙切れである名刺を、どうして子供たちから回収したのか。理由は簡単だ。翌月も同じように働いて家中をきれいにし、名刺を稼がざるを得ない様にするためである。

コロナ禍により、日本を含む世界の多くの国々で、政府は多額の支出を余儀なくされているが、その債務をどう処理すべきか、論議が始まっている。

そんな中、アメリカの経済学者、ステファニー・ケルトンが著した『財政赤字の神話』に出てくるこの話を思い出していた。ケルトンがフロリダにあるモズラーの家を訪ねたときに、聴き出した経験談である。

この逸話から何を学び取るべきなのか。税の真の目的は国民からお金を集めることではなく、社会生活に必要な物やサービスを国民に作り出させる為なのだ。今までと全く異なる考え方に戸惑いながらも、ケルトンはそう理解したと述懐している。